

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Ivrit : そのいくつかの特徴について
Author(s)	小脇, 光男
Citation	ニダバ , 10 : 24 - 31
Issue Date	1981-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046384
Right	
Relation	



Ivrit—そのいくつかの特徴について

小 脇 光 男

0.0. 現代ヘブライ語 (Ivrit, Israeli Hebrew, 以下 IH と記す) は、1948年イスラエル共和国の独立と共に、ユダヤ人国家の国語として復活した言語である。⁽¹⁾ この言語はその特異な言語史の故に、言語学的研究の対象として扱う場合、多少のためらいがあるように思われる。⁽²⁾ 規範的な立場から出発した復活の事業は、⁽³⁾ この言語が多種多様な相を含んでいるだけに、必ずしも成功した面ばかりではない。しかし、とにかく、Ivrit を母国語として育てている人口が着実に増加しているという意味で、この“言語の実験室”で行われた試みは、一応の成果を収めていると言えるだろう。⁽⁴⁾ 規範的な枠を越えて、今日国語として独自の方向に進み始めている IH は、当然のことながら、他の諸言語と同様な変化を見せようとしている。そして生きた言語として十分に観察、研究の対象となり得る段階に入ってきているのではないかと考える。ここでは、IH の特徴の一端を、復活時の諸事情にも多少触れながら、簡単にまとめてみたいと思う。

1.0. 語彙について

IH の復活に際して、人為的、計画的に押し進められた分野の中で、最も大きな成果があったのは語彙の分野であろう。これには書きことばの長い歴史が重要な基礎となっている。実生活や学問などに必要な語は、あらゆる時代のヘブライ語文献を調査し、その中からしかるべき語を復活させる。これが不可能な場合には、ヘブライ語文法に従って新しい語が生み出される。⁽⁶⁾ こうした仕事は通常、ヘブライ語アカデミーによって行なわれる。⁽⁷⁾ 出来る限りヘブライ語の語彙でまかなおうとする努力の反面、数多くの外来語も IH の中に定着しつつある。⁽⁸⁾ 以下に、この両面から、IH の語彙、語構成を見てみたい。

1.1. 合成によるもの。合成語は、旧約のヘブライ語にはほとんど知られていないが、ミシュナのヘブライ語には多く見られるということである。⁽⁹⁾ IH では、合成による造語が盛んに行われている。⁽¹⁰⁾

daxpor “ブルドーザー” (< dax “押す” + xfar “掘る”)

kolnoa “映画” (< kol “声、音” + noa “動き”)

kesnoa “ロッキングチェア” (< kise “イス” + noa “動き”)

ramkol “メガフォン” (< ram “高い” + kol “声、音”)

kadur-regel “サッカー” (< kadur “ボール” + regel “足”)

beynleumi “国際的な” (< beyn “間” + leom “国家、民族”)⁽¹¹⁾

1.2. 接頭辞によるもの。接頭辞の数はあまり多くなく、借用したのもいくつか見られる。

- (1) al- (否定) : alxut “無線”, almavet “不死”
- (2) i- (否定) : iefšar “不可能”, iseder “無秩序”
- (3) tat- (“下”) : tatyami “潜水艦”, tatmaxlka “下位分類”⁽¹²⁾
- (4) xad- (“一”) : had-xabari “単音節の”, xad-tdadi “一方的な”
- (5) du- (“二”) : du-mašmai “あいまいな”, du-lšoni “二言語の”⁽¹²⁾

1.3. 接尾辞によるもの。接頭辞に比べて数が多い。やはり外来語の接尾辞もいくつか見られる。

- (1) -ist (<-ist) : idealist “イデアリスト”, tankist “戦車隊員”
- (2) -nik (<ロシア語) : kibutsnik “キブツのメンバー”
- (3) -chik (<ロシア語の指小辞) : katan (“小さい”)-chik, milon (“辞書”)-chik
- (4) -(a)i (職業を示す) : bankai (“銀行員”), itonai (“新聞記者”)
- (5) -an (“ ”) : saxkan (“俳優”), mizraxan (“オリエント学者”)
- (6) -i (nisbe と呼ばれる接尾辞で、古典のヘブライ語では、民族名、地名の形容詞化にのみ使われたが、IHでは広く使用されている。特に外来語の形容詞化に使われる。aktivi (“active”), reali (“real”), otomati (“automatic”), lingvisti (“linguistic”)。⁽¹³⁾
- (7) -a 借用語の名詞に付して、女性名詞化する。universita (<university), psixologia (<psychology), informatsia (<information), komunikatsia (<communication), politika (<politics), lingvistika (<lingvistika (<linguistics), televizia (<television), fonema (<phoneme)

借用語がどのようにヘブライ語化されるのか、十分に調査されていないが、(6), (7)に見られるように、語尾を統一しようとする傾向がある。これは、名詞、形容詞の語形変化を容易にするためであろう。

1.4. 既存の名詞(多くは借用語)から新しい動詞を派生させる。この方法は、相当数の四字根動詞をIHの中にもたらすことになった。⁽¹⁴⁾

felefon “電話” → √TLPN. この語根から、四字根動詞の母音規則 CiCCeC に従って, ti-lpen (“電話をかける” 3人称・単数・過去) が派生する。その他、同様に, kitleg (<“catalog”), tilgref (<“telegraph”), 'ixles (<ギリシア語 ὄχλος), nitrel (<“neutral”)

1.5. 借用による。先に述べたように、多くの外来語が IH の中に定着してきているが、借用語と復活された語が共存している場合が少なくない。devalutsia/pixut (“平価切り下げ”), protsent/axuz (“パーセント”), komunikatsia/tiskoret (“コミュニケーション”), kosmos/xalal (“宇宙”) astronaut/tayyas-xalal (“宇宙飛行士”), student/talmid (“学生”) ⁽¹⁵⁾

更に, veidat pisga (“頂上の会議” > “首脳会談”), ovdey tsavaron lavan (“白いカラーの労働者” > “ホワイトカラー”) といった所謂 loan translation もしばしば行われているようである。

2.0. 俗語的な表現。IHに於ける俗語的な表現には、1)新しく生み出されたもの、2)既存の表現に新しい意味が付与されたもの、3)外国語からそのまま借用したもの、4)外国語からヘブライ語に翻訳して借用したもの、以上の四つがある。⁽¹⁶⁾ここでは、at random にいくつかの例を挙げることにする。⁽¹⁷⁾

(1) **bukra** 本来「明日」という意味のアラビア語であるが、転じて「決して～ない、勿論～ない」という否定の意味で用いられる。⁽¹⁸⁾

— Im hu hibti^šax še-hu yabo maxar, az hu betax yabo.

— Bukra yabo.

(「明日来ると約束したのだから、彼はきっと来るよ」「きっと来ないよ」<「明日来よ」)

(2) これに類似したものに inšallah がある。「アラーの思召しのままに」といった意味のアラビア語であるが、ヘブライ語では「多分、恐らく、望むらくは」という意味で用いられる。⁽¹⁹⁾

— Ata ba eleynu ba-šabat?

— Inšallah, im lo yarad gešem.

(「土曜日に家に来るかい?」「多分ね、雨が降らなかったらの話したが」)

(3) **halax** もっぱら「(～へ)行く、歩く」という意味でしか使われなかった動詞であるが、恐らく英語などの西洋語の影響で、次のような新しい用法が生じている。

(i) Lamaxarat hu halax linsoa le-Pariz.⁽²⁰⁾

(「次の日、彼はパリへ行こうとしていた」)

(ii) Ma holex po? (「何が起こったんだ?」)

(iii) Eyx holxim ha-asakim šelo? —Holex tov meod.

(「彼の商売はうまくいっているかい?」「順調にいっているよ」)

Eyx holex? (「元気でやっているか?」)

(4) **yatsa** 「(外へ)出る」の意であるが、「うまく事が運ぶ、成功する」の意味でしばしば使われる。由来についてはわからない。

Šnataym šobru et ha-roš al ha-beaya u pitom ze yatsa la-hem.

(「2年間もこの問題に頭を悩ましたが、突然うまく解決した」)

(5) **mea ahuz** 「百パーセント」の意で、「完全に、きっと」の意でしばしば使われる。

Mea ahuz še-lo taabor et ha-bxina.

(「絶対に彼は試験に合格しない」)

(6) **Eyx qorim le-xa?** 「人はあなたのことをどう呼ぶか?」すなわち相手の名を尋ねる表現である。ごく一般的に使われる **ma šim-xa?** に代わって、この言い方が力を持っているようである。

(7) **tihye ben-adam!** 「人間であれ!」という意で、転じて人に頼みごとをする際に「どうぞ～して下さい」の意で使われる。同じ意味を持ったものに **be-xayyeyxa** (“in your life”) があるが、これは外来語からの翻訳であろう。

Ten sigariya, tihyeh ben-adam!

(「タバコを下さい、お願いですから!」)

(8) その他、卑語や罵りのことばも多いが、これらは一般に記述が困難である。ここでは、よく聞にするものをいくつか挙げるにとどめる。

Kus-ummak (「お前の母さんの陰部」という意味で、アラビア語)、ben-zona (「売春婦の息子」)、この二つのことばは、いずれも「クソタレ!」というほどの意味ではあるが、文字通りの意味がよくないため、特に汚いことばとされる。他に、metumtam (動詞 timtem の受動分詞で、「バカ、白痴」の意。同じ意味で tipeš がある。mešuga, majnun (共に「気違い」の意。後者はアラビア語)。

3.0. 新しい語法。IH 中には、ヘブライ語自体の中で生じたものにせよ、又外国語との接触の結果生じたものにせよ、しばしば規範的な文法、語法から外れたものが見受けられる。

3.1. 所有表現に於ける et. ヘブライ語で所有を表わすには、yeš l-A B (「A は B を持っている」) という形式が使われる。e.g. (1) yeš l-i sefer. “I have a book”, (2) yeš l-i ha-sefer. “I have the book”, 勿論この形式に於いて、論理上の主語は B、すなわち (ha-) sefer である。ところが最近、この論理上の主語が定冠詞 ha- によって限定されている時、yeš l-i et ha-sefer の如く、et を付加する傾向がある⁽²¹⁾という。この傾向は移民のヘブライ語だけではなく、ヘブライ語で教育を受けている子供達にも認められるという。この現象をにわかには説明することはできないが、今の所、次のような原因を考えている。すなわち、yeš l-A が他動詞構文と感ぜられるため、B が限定されている場合には et を付してしまうのではないかということである。この形式では、論理上の主語 (B) が、強調等の特別な理由を除けば、文頭に出ることはなく、文頭に出た場合でも et ha-sefer yeš l-i とは言わないだろうと思う (主語が文頭にくる場合は、yeš l-A よりむしろ ets(e) l-A を使うようである e.g. ha-sefer etsl-i)。

3.2. Jussive と命令法。旧約聖書「創世記」I.3 に wa-yyomer elohim yhi or (「光あれ」) という一節がある。この箇所は現代ヘブライ語の訳で、še-yihye or となっている⁽²²⁾。すなわち、古典ヘブライ語の Jussive は、現代ヘブライ語では še-future (imperfect) という形で訳出されている。IH は Jussive の形を捨てた代わりに、新しい表現方法を生み出した⁽²³⁾。これは、願望を表わす語 (halvai “I wish”, “if only” など) が略され、še-以下の従属節が独立したものと考えられよう⁽²⁴⁾。更にこの še は、2人称の future を従えて、命令を表わす (但しこの場合、še は母音を落として š となる)。これも、先の Jussive と同様、従属節が独立して生じたものであろう。この形式の命令表現が出来たことにより、IH には 4 つの命令を表わす形式が備わったことになる⁽²⁵⁾。

- (1) 古典文法の形式によるもの bo! “Come!”
- (2) 2人称の未来形によるもの tabo!
- (3) (2)に s を付けたもの š-tabo!
- (4) 不定詞によるもの labo!

但し、すべての動詞がこれら4つの命令法の形式を使うわけではない。例えば、上例の“Come!”については、(1)と(2)によるものが最も普通で、(4)によることは、まず無いであろう。

注

- (1) 現代ヘブライ語に至るまでのヘブライ語史は、Sociolinguisticsの立場から書かれたものであるが、ヘブライ大学の著名な言語学者 Haim Rabin 教授による *A Short History of the Hebrew Language* (1973, Jerusalem) がある。同書によれば、ヘブライ語は、1.聖書のヘブライ語、2.ミシュナのヘブライ語、3.ディアスポラのヘブライ語、4.中世のヘブライ語、5.前現代のヘブライ語、6.ヘブライ語の復活、の如く時代区分されている。

ヘブライ語の復活が全く人為的に行われたと考える学者もいる (Noam Chomsky, *Language* Vol. 30 pp.180-181) が、これは正しくないだろう。70年にローマ軍によってエルサレムが陥落し、離散の民となってからも、ユダヤ人は全時代を通して、ヘブライ語で学問、文学活動を行なった。又宗教的なユダヤ人は安息日にヘブライ語だけを話し、ユダヤ人の間では、ヘブライ語が共通語となることもあった。特に、エルサレムでは、各地から巡礼にやって来たユダヤ人の中で、共通語がない場合には、ヘブライ語が共通語として話された、という報告がある。19世紀末には、ユダヤ人をキリスト教に改宗させる目的で、新約聖書のヘブライ語訳も出版されている (筆者の所有しているヘブライ語版新約聖書は、1910年のもので、文法、文体は旧約のヘブライ語を手本としている)。そして、英国のパレスチナ統治時代 (1917~48年) には、英語、アラビア語に加えて、ヘブライ語も公式に使用されていた。このあたりの事情については、H. Rabin 上掲書の他、次の論文等を参照されたい。

Parfitt, T. V., "The Use of Hebrew in Palestine 1800-1882" in *JSS* 1972. pp.237-252.

Landau, J., "Language Study in Israel" in *Current Trends in Linguistics* ed. by Th. Sebeok. Vol. 16, p.721.

Waldman, N. M., "The Hebrew Tradition" in *Current Trends in Linguistics* ed. by Th. Sebeok Vol. 13, 1975, pp.1285-1330.

Rabin, H., "Hebrew" 同書 Vol. 6. 1970, pp.304-346.

Morag, Sh., "Planned and Unplanned Development in Modern Hebrew" in *Lingua* VIII. 1959.

現代ヘブライ語全般については、*Encyclopedia Judaica*, Jerusalem 1972のHebrew Grammarの項を参照。

- (2) Ullendorff, E., "Modern Hebrew as a Subject of Linguistic Investigation" in *JSS* II, 1957.

前田護郎 「ヘブライ語」(「世界言語概説」研究社, pp.1096-1152). 「…現代のイスラエル国は…言語史的にも思想的にも意味が少ない」(pp.146~)

1948年よりも前に、多少とも IH に触れたものとしては、

Bergsträsser ; Einführung in die semitischen Sprachen, Darmstadt 1928. pp.46-47.

Pleßner, M., “Moderne Hebräische” in OLZ 1931. pp.804-808.

この外、多くの論文がイスラエルの内外で出されているが、未見のものが多い。

(3) Blanc, H., Language Vol. 32 pp.794-802 (=Haim Rosén, Ha-ivrit *šelanu* の書評論文)

(4) イスラエル大使館発行 “Facts about Israel” 1978 年版によれば、イスラエルのユダヤ系市民の総人口は 2,959,400 人で、その内 51% がイスラエル生まれ、27% がヨーロッパ、アメリカ生まれ、22% がアジア、アフリカ生まれとなっている (1975 年の統計による)。

(5) IH の復活運動は、外国の言語学者達からも、興味をもって見られていたようである。例えば、ペデルセン「言語学史」伊東只正訳、こびあん書房、昭和 49 年 p.113.

(6) Rabin, 1973 上掲書 pp.9-13.

IH の基礎語彙 1000 語中、800 語は聖書のヘブライ語のものであり、これは旧約の全語彙の約一割に相当するという。またタルムードのアラム語中、2000-3000 語が今日普通に使われており、Even Shoshan の「ヘブライ語辞典」(二版)には、ミシュナのヘブライ語が 14,000 語、中世のヘブライ語が 6,500 語、復活後に造られたものが(科学技術系の専門語を除いて) 15,000 語載せられているという。

(7) ヘブライ語アカデミーについては、

Fellmann, J., “The Academy of the Hebrew Language : Its History, Structure and Function” in IJSL 1974, Mouton pp.95-103.

Landau, J., “Language Study in Israel” in Current Trends in Linguistics, ed. by Th. Sebeok Vol. 6, pp.723-724.

(8) 外来語の侵入に反対する意見にもかかわらず、ヘブライ語は古くから借用語に満ちている。特にミシュナのヘブライ語は、ギリシア語から多くの語彙を借用しており、IH はミシュナの語彙なくしてはやっていけないと言える。例えば、avir “空気” (< ἀήρ), aksanya “宿” (< ξενία), pinkas “手帳” (< πίναξ), tik “カバン、ハンドバッグ” (< θήκη), partsuf “顔、性質” (< πρόσωπον) など参照。

IH に入っているアッカド語、ペルシア語、アラビア語、ラテン語については、

Kutscher, E. Y., Milim ve-Toldoteyhen (=Word and their History) Jerusalem 1974.

復活させた語彙、借用した語彙を合わせれば、IH は専門用語、抽象語についても十分対応できるだけの語彙を備えていると言える。

(9) Mishna のヘブライ語については、

Segal, M. H., A Grammar of Mishnaic Hebrew. Oxford 1970.

(10) 語構成等の問題については、やや通俗的であるが、E. Horowitz ; How the Hebrew Language

Grew, Ktav Publishing House Inc. 1960.

- (11) leom と同じ意味を持つ om を使って、更に bin'em (動詞) と bin'um (名詞) を派生させている。
- (12) tat- はアラム語, du- はギリシア語からの借用である。
- (13) Rosén, H., " Sur Quelques Catégories à Expression Adnominale en Hébreu Irsaelien " in BSL53, 1957, p.320.
- (14) Morag, Sh., Lingua VIII, 1959, p.256 参照。
- (15) 言語学の用語についても同様である。
fonologiya/torat-hege ("音韻論"), morfologiya/torat-tsurot ("形態論"), sintaksis/torat-taxbir ("統辞論"), infiks/toxit ("接中辞"), prefiks/txilit ("接頭辞"), sufiks/sofit, siyomet ("接尾辞") etc.
- (16) Kornblueth, I. and Aynor S., " A Study of the Longevity of Hebrew Slang " in IJSL 1974. Mouton, pp.17-18.
- (17) IH の口語, 俗語を十分に記述したものは無いが, 次の辞書が有益である。
Ben-Amots & Ben-Yehuda, Milon Olami Le-Ivrit Meduberet Jerusalem 1975. なお, この辞書の書評が IJSL 1974. pp.148-149 にある。
以下の例文は, 大部分この辞書によった。
- (18) アラビア語の bukra は, 文字通り " 明日 " を意味するのではなく, 未来の不定時を指しているところから。
- (19) bukra, insallah は, アラブ人の生活態度をよく表わしていることばだと言われる。
- (20) linsoa は, 「乗り物で行く」(cf. 独語 fahren) の意で不定詞。halax は " be going to " の意味で使われている。
- (21) Ziv, Y., " On the Reanalysis of Grammatical Terms in Hebrew Possessive Construction " in Studies in Modern Hebrew Syntax and Semantics, North-Holland Linguistic Series 32, 1976, pp.129-152.
又同誌の pp.265-285, Berman R., and Grosu A., " Aspects of the Copula in Modern Hebrew. ", Rabin, H., 1973 上掲書 p.80.
- (22) 旧約の現代ヘブライ語訳はない。ここで使用したのは, 創世記の数節を試みに口語体で書いたもの。
Sifron Le-Student (step 4-5) Jerusalem 1976. pp.144-147 を参照。
- (23) E.Ullendorf の上掲論文. JSS(1957). IH の特徴を, 1) Jussive と Cohortative を捨てた, 2) consecutive waw を捨てた, 3) tense が trilinear system (過去, 現在, 未来) になった, 4) 属格に še を使う, の四つにまとめている。
- (24) Ben-Amots, Ben-Yehuda 1975, 上掲辞書 p.216 参照, 又, Rabin H. Mašmauyoteyhen šel

ha-Tsurot ha-Diquqiyot ba-Lašon ha-Miqra ve-Lašon Yameynu, Jerusalem 1971,
p.25.

(25) Bar-Adon, A., "New Imperative and Jussive Formations in Contemporary Hebrew"
in JAOS 86, 1966, pp.410~.

(付記) 注(1)の新約聖書のヘブライ語訳について。関根正雄「聖書翻訳の理論と課題」(岩波「文学」
1980.12 Vol. 48. p.147)によれば、新約聖書は1887年にヘブライ語に訳された。1979年には現代ヘ
ブライ語による翻訳も出されたとのことであるが、筆者は未見である。この新約の現代ヘブライ語訳に
ついて、関根教授は、福音書はその背景がセムの世界であることから抵抗なく読めたが、パウロ書簡は
地中海世界をその背景としているので、ギリシア語の方がよい、という意味のことを言っておられる。
多種多様な要素を含んで成立した IH が、言語的にセム的な世界を反映しているかどうかは興味ある問
題である。これに関しては、

Ullendorf, E., "Modern Hebrew as a Subject of Linguistic Investigation" JSSII. 1957.

Wild S., "Ist Ivrit eine semitische Sprache?" in ZDMG Supplement III, 1977 pp.757~
761.

Bergsträsser G., "Einführung in die semitischen Sprachen" Darmstadt 1975 p.47.

などでも触れられていることを付け加えておくにとどめる。